

各関係機関長様

佐賀県農業技術防除センター所長

タマネギ定植前後の病害防除対策について



定植前のセル苗の様子

平成31年産(令和元年産)タマネギでは、栽培後期にべと病の発病が多くの圃場で認められ、一部に多発生となった圃場がみられました。また、近年は、乾腐病による収穫後のタマネギの腐敗や、腐敗病や軟腐病による立毛中の被害も問題となっています。これらの病原菌は土壌に残るため、前年に発生した圃場にタマネギを定植すると、再び感染して発病する恐れがあります。

これらの病害の発生を抑制するうえで、定植前後の防除対策が重要となります。については、対策が確実に実施されるよう、下記事項を参考に、生産者への指導をお願いします。

記

1. タマネギべと病対策(詳細は、令和元年8月8日付け病害虫対策資料第5号を参照)

1) 苗床での感染防止

苗床での感染を防止するために、育苗期にフロンサイドSCを散布する。べと病菌が残存する苗床での育苗期間が長い(定植が遅れる)と、苗床での感染の危険性が高まるので、育苗および定植は、計画的かつ適期に行う。

2) 本圃の準備

可能な限り、これまで本病の発生のない圃場を用いる。さらに、暗渠・明渠や高畝による排水対策を行うとともに丁寧に耕起し、べと病が発生しにくい環境づくりを行う。なお、本圃の準備は時間に余裕をもって行う。

3) 定植後の感染防止

本圃での感染による発病を抑えるため、定植前(定植5日前~前日)にジャストフィットフロアブルを、定植14日後頃にザンプロDMフロアブルを散布する。安定した効果を得るために、薬液の量は、300ℓ/10a 散布する。なお、購入苗や作業委託の場合

には、ジャストフィットの散布は定植直後に行う。定植日から日数が経過するにつれて効果が不安定になるため、直ちに行う。

4) 一次感染株の抜き取り徹底 (写真1参照)

一次感染株 (越年罹病株) (写真1) を圃場に放置していると、その株上に分生孢子が作られて二次伝染源となり、その後のべと病の多発生につながる。

一次感染株の発生時期 (1月以降、2月~3月中心) には定期的に圃場を見回り、発生を認めた場合は、直ちに抜き取り、圃場外へ持ち出し処分する。



写真1 ベと病の一次感染株

2. タマネギ乾腐病対策 (写真2、図1参照)

前年に発生した圃場など、発生の恐れがある圃場に植え付ける場合は、地床育苗の苗は、定植直前にベンレート水和剤またはトリフミン水和剤を根部浸漬し、セル育苗の苗は、定植前日に同薬剤をトレイに灌注する。



写真2 乾腐病による茎盤部の腐敗

【参考データ】

● 薬剤の定植前処理による収穫後のタマネギにおける乾腐病の防除効果の例

定植前のセル成型トレイ苗への薬剤処理による、収穫後の貯蔵タマネギに発生する乾腐病への防除効果を調査した。

その結果、無処理区の発病球率が14.0%の条件下において、トリフミン水和剤のトレイ灌注が3.7%、ベンレート水和剤のトレイ灌注が1.2%、同剤の苗根部浸漬処理が7.4%と、発生を低く抑えた。

このことから、これらの薬剤処理が乾腐病の発生抑制に有効であることが確認された。

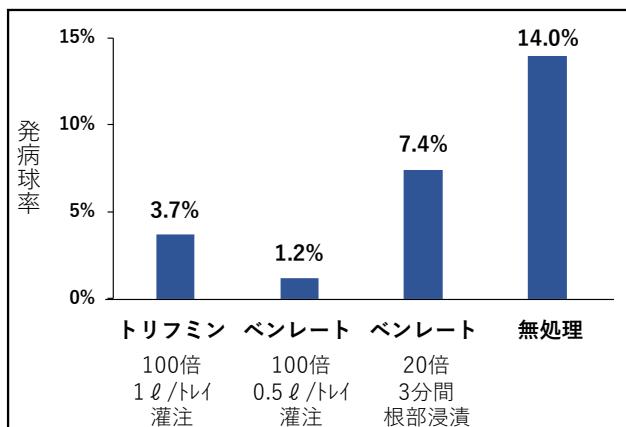


図1 各薬剤の定植前処理の乾腐病抑制効果の例

(農業試験研究センター、2013年)

品種：ターザン、定植：2012年12月14日(薬剤処理は定植当日に実施)、調査株数：24~30株、3反復、菌懸濁液により汚染土を作出し、圃場の土に混和。
2013年6月4日に収穫後、同年8月19日まで雨よけ施設で貯蔵。約2週間間隔で発病球を調査した。

3. 腐敗病、軟腐病対策（写真3参照）

育苗期から薬剤防除を徹底する。べと病と同様に、暗渠・明渠や高畝による排水対策を行い、発生しにくい環境づくりを行う。また、発病株（写真3）は周囲への伝染源となることから、速やかに抜き取り、圃場外へ持ち出し処分する。



写真3 腐敗病による被害株

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部
〒840 - 2205 佐賀市川副町南里 1088
TEL (0952) 45 - 8153 FAX (0952) 45 - 5042